

新刊紹介

本田弘之著 (2012)
『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の
日本語教育の研究』
ひつじ書房、293頁

李 守

中国を旅行して、たくみに日本語をあやつる添乗員の対応をうけたことがあるなら、そのガイドをつとめたのは、本書が研究対象とする朝鮮族であった確率がかなりたかいだろう。朝鮮族とは19世紀末から20世紀なかばにかけて、朝鮮半島から中国東北地方へ移住した朝鮮人の末裔である。東北三省（黒龍江省、吉林省、遼寧省）を中心に約192万人がくらすとされる。中華人民共和国成立後は、少数民族として「認定」され、中国での定住を選択し、今日にいたる。

本書は1989年、日本語教師として吉林省長春市に赴任した著者が、はじめて朝鮮族とであい、かれらのはなす流暢な日本語に触発され、その淵源を約20年の歳月をかけてさぐりあて、さらに、日本語乃至日本語教育が朝鮮族の共同体におよぼしたさまざまな影響について観察し分析した記録である。

国際交流基金の委託により、はじめて中国の日本語学習者数が調査された1990年当時、総数249,000人のうち、朝鮮族のそれは76,000人と推計された(本書98ページ)。総人口12億、56の民族からなる中国において、日本語をまなぶものは、人口がわずか190万にすぎない少数民族である朝鮮族に集中していた。わずか20年まえ、中国における日本語学習者の三人にひとりをお朝鮮族がしめていたのである。しかし、かれらは「見えない日本語学習者」として、ながいあいだ日本語教育研究の空白となっていた。日本の海外渡航自由化が1964年からはじまり、台湾を再訪する日本人が「再発見」した日本語について懐旧談を数多くのこしているのとは対照的である。1972年の国交正常化以降、中国旅行がブームとなり、旧満洲の地を再訪した日本人は相当数にのぼるにもかかわらずである。

かつて日本は台湾、朝鮮を植民地とし、国語（日本語）の普及につとめた。その経

験は「満洲国」における教育にもいかされた。同地に移住した朝鮮人に対する教育にかぎれば、それは朝鮮総督府の制度が準用され、朝鮮半島とおなじく基本的に日本語でおこなわれた。「満洲国」を構成する五族のなかで、かれらの就学率はたかく、その結果、母語に準ずる日本語運用能力を習得したものも少なくない。中国朝鮮族と日本語との関係は「満洲国」時代に日本語を学習した世代からはじまるのである。

本書は4章から構成される。第1章は「研究の目的と方法」。現代中国を研究するものがだれしものなやまされる資料の制約は、朝鮮族の日本語教育にもあてはまる。とりわけ文化大革命期をはさむ1960年代から70年代にわたる20年間の資料はとぼしく、たとえあったとしても、各種の統計数値は眉にツバしてかからなければならない。本書はそうしたハンディを日本語教育関係者のオーラルヒストリーを聴取することによっておぎなう。著者は黒龍江省の朝鮮族中学で1学期間、職員室に机をもち、日本語教師として教壇にたつほどに、かれらの信頼のかちえた。理想的な条件のもとで参与観察と調査がおこなわれている。

第2章は中国の教育制度のもとで朝鮮族の民族教育が成立した過程をあとづける。憲法は諸民族の一律平等をうたい、少数民族の言語と文字を發展させる自由を保障する。「満洲国」時代から教育熱心で知られたかれらは、社会主義体制のもとでも、少数民族として享受しえる権利を最大限に行使して、幼稚園から大学にいたるまで、民族教育の体系をととのえた。朝鮮族の最高学府である延辺大学は、建国にさきだって設立されている。しかし、教育が整備され優秀な人材がそだてばそだつほど、少数民族のつねとして、頭脳流出の問題がたちはだかる。頭脳流出もさることながら、いま朝鮮族社会は共同体が縮小・解体のせとぎわにある。そして、こうした朝鮮族の移動をうながした要因のひとつが、後述するように、日本語教育なのである。

第3章は本書の中心部であり、朝鮮族による日本語教育の実際が微細にわたり論じられる。東北在住の朝鮮族は建国まえから土地改革により平等な農地の分配をうけ、延辺朝鮮族自治州が創建（1952年）されると、農工業が發展し、生活が向上し、教育制度が整備された。しかし1958年から「反右派闘争」、66年から「文化大革命」がはじまると、他の少数民族とおなじく、死亡者、重傷者をふくむ、甚大な被害をこうむった。

日本語教育は文革が終息した1976年から「再開」される。外国語として英語ではなく日本語がえらばれた理由は、社会的混乱により外国語教育の空白がつづき、教員の確保が英語はむつかしく、日本語は容易であったというにすぎないようである。教員に採用されたのは「老一代」とよばれる、「満洲国」時代に日本語を学習した世代で

あった。こうして朝鮮族の中等教育における日本語教育は、日本における日本語教育の動向とは無関係に、「満洲国」時代の国語教育の延長線上に、1980年代末まで独自に展開したのである。

本書で日本語学習が「再開」と表現するのは、こうした理由からである。ところで、「老一代」の教員たちは日本語を「国語」として学んだのであって、外国語としての日本語教育は経験したことがない。したがって、かれらの「教授法」はいきおい直説法とならざるをえなかった。しかし、教科書中心の暗記に重点をおく中国の中等教育において、かれらの教えかたは一定の効果をあげた。おりしも1978年から大学受験が再開されると、機械的な暗記の授業は、入試で実績をあげるのに効果的であった。英語で受験する漢族と日本語で受験する朝鮮族とで、得点に有意差がついたのである。こうして朝鮮族は大学受験に有利な科目として日本語の教育をさらにおしすすめたのである。

ところで、外国語学習の動機づけには、学校の教科目として、好成绩をとりたいという一般的・実利的な動機のほかにも、外国人とコミュニケーションをとりたいとねがう文化的な動機がある。昨今、外国語教育は単なる学校の教科目であることをこえて、学習対象となる言語をはなす集団に対して共感がうまれることを理想としている。そういう意味では、約30年まえに中国の東北地方で「再開」された日本語教育は、きわめて異様にうつるだろう。ことの是非はさておき、日本人の手をはなれ、受験技術に特化された「かれらの日本語」(安田敏朗)の役わりは、文化大革命終息後、「改革開放」の時代をむかえるなか、さらに変貌をとげていく。

第4章は朝鮮族における日本語教育の変遷をおう。日本と国交を回復した中国に、日本人観光客がおとずれるようになると、日本語のできる朝鮮族が通訳として採用されるようになった。改革開放時代をむかえ、外国企業が中国に進出しはじめると、人材不足が露呈する。とりわけ日系企業が進出した中国南方地方では、日本語通訳の供給が需要においつかず、そこで白羽の矢がたったのが、とおく東北の地で中学校から日本語をまなんだ朝鮮族であった。当時としては破格の賃金が、朝鮮族の日本語学習意欲をさらにかきたてた。朝鮮族のわかものは日本語を習得し、条件のいい職をもとめて、東北三省をはなれ大都市へと移住しはじめた。

共同体の縮小・解体にさらにおいうちをかけたのが、韓国との修好(1992年)であった。「満洲国」時代に移住した朝鮮人は、半島南部の出身者が多く、訪韓は親族訪問からはじまり、のちには出かせぎが常態化したのである。中国の最新人口統計では朝鮮族人口が192万とされているものの、韓国法務部が発表した韓国居住朝鮮族人

口は 358,427 人（2010 年）であり、中国国内の大都市に移住したのもふくめれば、相当数がすでに東北地方をあとにしている。水稲耕作を生業とし、漢族と接触する機会もすくない均質的な農村空間でいとなまれた伝統的な生活はもはやとりもどすべくもない。

外部世界との接触は朝鮮族の漢語化をすすめる。一面において、それまで中国では近代化のおくれが朝鮮語を保護してきたともいえよう。1990 年代に南方へ移住した朝鮮族の多くは、みずからの漢語能力の貧弱をあらためて認識したという。商品やテレビの普及によって家庭に浸透する漢語は、若年層の漢語能力を飛躍的にたかめた。漢語能力と反比例するようにかねらの朝鮮語能力はおとろえている。朝鮮族にかぎらず、中国の大規模な都市化は少数民族語の維持・継承をおびやかしている。

本書はタイトルがしめすとおり、あくまでも「日本語教育の研究」である。しかしながら、その射程はひろく、朝鮮族の日本語教育からはじまり、中国少数民族がかかえる諸問題、とりわけ民族言語と文化の維持・継承をも視野におさめた、エスノグラフィの性格をあわせもつといってさしつかえないだろう。日本語教育という専門をこえて、朝鮮・韓国、中国、ならびに言語政策の研究者にも一読をすすめたい。

(昭和女子大学)